



いわいしま通信

権伝馬船の船おろし

祝島の船大工・新庄和幸さんが造った権伝馬船が完成し、5月2日に船おろしが行われました。この権伝馬船は、広島県大崎上島から依頼されて造った船だそうです。

船おろしは、港のスロープを利用して海に船を送り出すため、潮が満ちている時に行われます。この日は、早朝の7時前に、島の男たちが新庄さんの造船所前に集まり、造船所から船を引き出して、無事に海まで送り出しました。

木造船を造れる船大工は、今では全国的にも数少なく、新庄さんのところには、もう次の木造船の注文が入っているようです。



造船所から船を運び出す



このあと権伝馬船は海へ

にこにこ農園だより(11)

今年もびわの季節を迎えましたが、年々ひどくなるのがイノシシ被害。実を食べてしまうだけでなく、太い枝も100kg級のイノシシが乗れば押し折れてしまい、元の形状をとどめていません。びわ農家さんでは、今年は寒の冷え込みの影響を受けた場所もあって、びわの収穫量は例年より少なめだったようです。



にこにこ農園にて

にこにこ農園のびわは、久しぶりの民宿営業が忙しく、下草刈りが終わるころには、もう実が色づき始めていました。袋を掛ける時間もなかったので、カラス除けのネットをとところどころ覆っておいたところ、少しばかり裸びわを収穫することができました。しかしながら、販売できるようなものではないし、早い梅雨入りで、しとしと降る雨を恨めしく眺めるばかりとなりました。秋になったら、また草刈りをして山の整備をできたらいいのですが・・・皆様、ご協力をお願いします。

目次

権伝馬船の船おろし	1
にこにこ農園だより	1
祝島・記憶の玉手箱	2
会員リレーコラム	4
絵つき一覧覧会	5
祝島自由律俳句	6
読書タイム	6
祝島の暮らし	7
千客万来	8
山田イサオ写真館	9
『新日本風土記』撮影秘話	10
お知らせ&募集	12
編集後記	12



「祝島物語」 画・大井しげる

<連載> 祝島・記憶の玉手箱(30)

～ 戦争と平和 ～

語り部:けんちゃん

島のお年寄りに、毎回違うテーマで昔の祝島の様子を話していただく「祝島・記憶の玉手箱」シリーズ。前回の続きで、祝島に帰省された、けんちゃん(82歳)に、子どもの頃の思い出話を聞かせていただきました。今回は特に、戦時中の思い出と、子どもの頃の遊びについてのお話を紹介します。



前回に引き続き、いろいろな話を聞かせてくれたけんちゃん

司会:けんちゃんが生まれて物心ついた頃はちょうど戦時中でしたよね。お店のこと以外に、当時のことで覚えていることはありますか？

けんちゃん:あれはねえ、昭和20年の、確か桜が咲いてたと思うんですよ。神社の階段のね、一番下に広場があったの。周りが桜だったんですよ。今よりもっと桜があったと思います。白い服を着た水兵さんが円になって、酒盛りしとったんですよ。それがちょうど昭和20年4月だと思うんですよ。

司会:けんちゃんは何歳だったんですか？

けんちゃん:私は4歳。9月生まれだから4歳と7ヶ月くらい。

司会:水兵さんたちは何人くらいおられたんですか？

けんちゃん:わかりませんが、結構いたような気がしますね。こういう風に円になってね。私の記憶じゃあ30～40人いたような気がしますねえ。真っ白い服を着てねえ、歌を歌ってたのを覚えてます。それを子どもながら眺めていましたけど。

司会:その場面が印象に残ってるんですね。

けんちゃん:後々ね、平生町の田名埠頭の所に回天の記念館ができたんですよ。そこに行ったら、壁に亡く

なった人の写真が飾ってあってね。あの時円陣を組んでた人たちのうちの何人かじゃあなかろうかと想像したわけですよ。それが最初の「戦争」のイメージじゃったです。

司会:そうかもしれないですね。

けんちゃん:戦争については、他にはね、三浦湾で貨物船が空襲されて沈没して、死傷者がいっぱい出て、上の方の中学校の廊下に負傷者が、ずらーっと寝かされてたのを覚えています。その当時は、中学校が2つに分かれてましたから。下の中学校は今の役場のところ、上の中学校は今の診療所のところと、2カ所に分かれて中学生は勉強してたんですよ。それで、近所の人だね、ドラム缶で火を焚いて、鍋やら釜やらでご飯炊いたり、おかずを作ったりしていたのが記憶に残っています。

あと、光の空襲。終戦の前日の8月14日ね。光工廠には祝島から40人くらい学徒が働きに行っていて、そのうち亡くなった人が半分って言われてましたから。それで、私はね、松村のショウちゃんというのがおられたんですよ。今の学校の西の階段があるでしょう、あの途中に一軒家があったんですよ、あれが松村のお家じゃったんです。そこには子どもが一人しかいなかったんです。私らは「松村のショウちゃん」って呼びよったですけど、丸顔でねえ、覚えちよるんですよ、その人を。その人が、光工廠に行って亡くなられたんです。一人っ子が。そこのお母さんが本当にねえ、いづも哀しい顔をされてたのを、ずっと子供心に覚えて



かつて平生回天訓練基地があった場所に建てられた阿多田交流館(手前は人間魚雷「回天」のレプリカ)館内には回天に関する資料が多数展示されている

いますよ。当時14か15才ですかねえ、中学2年か3年くらいで光工廠に働きに行つて空襲に遭つたんですから。

司会：哀しい思い出ですねえ・・・。あの空襲の様子は祝島からも見えたと聞いていますが、あの時、けんちゃんはどうされていましたか？

けんちゃん：防空壕に入ってたね。

司会：祝島にも防空壕はあったんですか？

けんちゃん：あちこちに掘ってましたよ。今はもう残ってないですけどね。私らは学校の西の階段のすぐ横の防空壕に入つて、8月14日の光の空襲の時は、防空壕からちょっと出てみたら、入道雲みたいな大きな真っ黒い煙が見えましたよ。よく覚えてます。ものすごい天気の良い日だったんです。

司会：祝島の近くにも爆撃機が来たんですか？

けんちゃん：光で焼夷弾を落とした爆撃機が祝島の沖まで飛んできて、そこで回転して、また光の方に引き返しては、何度も焼夷弾を落としたと聞いてます。祝島におつた者は皆、防空壕に入ったり、山の方に逃げたりしてたんじゃないですかね。

司会：大変な時代をよく乗り越えて来られましたね。では、ちょっと話題を変えて、けんちゃんの子どもの頃はどんなことをして遊んでたか聞かせてください。

けんちゃん：子どもの遊び言うたら、まずは「ぶっつけ（めんこ）」ね。「ぶっつけ」いうのはね、祝島じゃあ地面にわりと平らな大きい石があって、そこから相手のを出すんです。バシッと、こうやるわけですよ。私が一番覚えてるのは、ひらぎの橋本があるでしょ。あそこの門の所にいい石があるんですよ。このくらいの石が。そこでようやりましたね。それから、橋本の上に久保田いう家があって、あそこに綺麗な石があってね。そりゃあよくやりました。

司会：みんな家の近くに、いい石を見つけて、そこでやってたんですね。私はそこの井戸端の石でよくやりました。

けんちゃん：そうですよ。もう、血が出るくらいやりました。（笑）

司会：そうそう。時々、指を石にぶつけて血豆を作りましたよね。

けんちゃん：もう血だらけでしたよ。（笑）

司会：ははは。

けんちゃん：そいたら、一回ねえ、遠征したらねえ、江本のタンダーが（ぶっつけに）重油を浸み込ませちよるんですよ。こりゃあ勝てんわねえ！こがいなでかいやつに重油を。そりゃあ重くなりますよねえ。絶対勝てませんよ。裏返す



「ぶっつけ」で遊ぶ子どもたち
（絵：重村通子）

か、石の外に出すしかないんですから、無理ですよ！

司会：それは反則ですよ。（笑）

けんちゃん：それから「マール（ビー玉）」もようやりましたね。そりょう取り合いするんじゃあ。当たったら取るとかね。よう当ててましたよ。こうやって、2メートルくらい向こうでも当たるんですよ。

司会：マールはいろんな遊び方があるんですよ。僕たちは、イチ・ナカ・ヨコ・テンって穴を掘って遊ぶやつを一番よくやってたけど。

けんちゃん：そういうのもあったねえ。そいてからねえ、カズタケが「桜凱旋」言うのをやり始めてね。他所から持ってきたんですよ。あれが中学校の時に、やり始めたの。

司会：僕たちも「桜凱旋」をよくやってたけど、それが祝島での発祥ですかね？

けんちゃん：それが発祥じゃろうねえ。誰もそれまで知らんのじゃけえ祝島の人。そいて、山本のトージューが一番強かったからねえ。今でもありゃあ元気でしょう。あれがおる方がだいたい勝ちよった。

司会：そうですか。

けんちゃん：あと、「馬乗り」もよくやってたねえ。

司会：「馬乗り」は、僕たちもよくやりましたよ。こうして伺ってみると、遊びは僕たちの頃でもそんなに変わっていないですねえ。それにしても、戦争が終わって、子どもたちが大らかに遊んでいられる平和な時代になって、本当に良かったと思います。

今日は貴重なお話、ありがとうございました。まだまだ、しゃべり足りないと思いますが、またの機会に、ということで、今日はこれでおしまいです。

このコーナーは「祝島ネット21」の会員の皆さんに、自己紹介を兼ねて簡単なコラムを書いていただくコーナーです。今回は、かつて祝島中学校で教鞭をとられた、森光泰志さんです。

祝島ネット21の皆さん、会員の森光泰志と申します。この度会員リレーコラム2周目という依頼を事務局から受け、執筆させていただきました。自己紹介を含め、私が祝島で過ごした時の思い出を中心に伝えできれば、と思います。



森光泰志さん

私は現在、柳井中学校で教員をしております。全校生徒545名の、柳井市近隣では最も在籍生徒数の多い中学校で勤務しております（令和5年4月10日現在）。

私が祝島とのご縁をいただいたのは、平成12年の3月でした。当時は臨時採用として教員をしておりましたが、次の勤務先は祝島です、と管理職から伝えられたところから始まりました。

祝島中学校へは、平成12年度に1年間勤務させていただきました。受け持った学年は2年生で生徒は1名。全学年合わせても6名という極小規模校で、人数の少なさに驚きましたが、同時にこれから始まる新しい生活に期待をしていたことも思い出されます。

大まかな一日の生活は、朝7時過ぎに、港前の「は

まや旅館」で朝食をいただき、学校へ。午前中の4コマの授業が終われば中学校の教員は小学校校舎に移動し、小学生と一緒に給食をいただきました。昼休みはグラウンドで小中学生が一緒になってサッカーをよくしていたと記憶しています。小学校も中学校も若い先生方が多く、教員間の仲もとても良かったので、児童生徒に負けまいと、本気になってボールを追いかけていたことが懐かしく思い出されます。

午後からは2コマの授業、掃除、終わりの会が終われば放課後です。夕方6時頃には、はまや旅館で夕食をいただきました。はまや旅館での食事は、祝島小中学校で働く教員にとって、大きな活力になりました。毎日、美味しい料理を食べさせていただき、本当にありがとうございました。感謝しかありません。

祝島中学校の生徒達とはとにかく素直で一生涯懸命、そして人なつこい子達ばかりでした。授業にも集中して取り組みましたし、積極的に発表する姿にも感心しました。また、島のことについても色々教えてくれ、祝島の歴史や魅力に気づいていく自分がいました。夏休み前の水泳授業では、港の中での授業。生徒達は臆することなく海へドボン！！。そして楽しそうに泳ぐだけでなく、水深2～4m位はあると思われる海底まで簡単に潜っては浮き上がってくる姿にあっけにとられました。何でこんな事が簡単にできるんだ？と驚かされました。運動会では全校生徒だけでなく教員も一輪車に乗って競技するプログラムがありました。私にとっては初の一輪車体験。当然、うまく乗れるわけがありません。でも、軽々と乗りこなす小中学生を見て、絶対乗れるはず！と思い、放課後毎日練習を重ね、本番当日は何とか乗れるぐらいにはなりました。



給食は祝島小学校のランチルームで



秋の運動会（平成12年9月）
子どもたちは軽々と一輪車に乗っていた



マラソン大会（平成12年11月）
子どもたちに負けないようがんばりました

でも、最後まで何もつかまらずにその場で立ち上がる技はマスターできませんでした・・・。

中学校からの高台から毎日見る美しい島の風景、ココアの実と徐福伝説、石積みの練塀、石積みの棚田、島の美味しい産物の一つであるピワ、新鮮な魚介

類など、思い出せばキリがありません。その中でも、祝島で4年に一度執り行われる神舞に参加させていただいたことは、私にとって得がたい体験でした。

1年間の勤務はあっという間に過ぎ、3月には島を去る事となりました。僅か1年という短期間ではありましたが、とても中身の濃い教員生活を送ることができました。この経験があったからこそ、その後に勤務した職場での辛い時期も乗り越えられてきたように思います。まだ、教職員としての勤務は十数年ほど残ってはいますが、これからも新たな学校、新たな勤務地で頑張っていきたいと思っております。

最後に、勤務させていただいた1年間の間にお世話になりました全ての祝島の方々へお礼申し上げます。有り難うございました。皆様のご活躍をお祈りいたします。

柳井中学校教諭 森光泰志

絵つき一覧覧会(39) 『日暮れどき・小祝島と初夏の水田』

エッキー浴野

早苗がゆれる三浦の水田。船も鳥も港へねぐらへ帰る頃。
刻々と、移り変わる夕焼け空も穏やかに水面へ映りながら、過ぎてゆきます。



「日暮れどき・小祝島と初夏の水田」 パステル画 B2サイズ

祝島自由律俳句(11)

山口県防府市出身の俳人・種田山頭火。彼の作った俳句は、五七五の定型にも、季題にもとられない自由な表現が特徴の自由律俳句といわれています。このコーナーでは、読者の皆さんから「祝島」をテーマにした自由律俳句を投稿していただき、毎回その中から何句かを紹介させていただいております。

見上げれば島は山桜命アフレ色アフレ

祝島桜鯛見事な一本釣りで

達塔華（浴野 達宏）

紅白の梅もめでたや祝島

島の空三十年ぶり鯉泳ぐ

國弘 秀人

ひじき

鹿尾菜炊く傘寿の漁師きらめいて

石を積む積んで傘寿や風薫る

大豆蒔く今日の夕餉は島豆腐

篠崎 幸恵（『新日本風土記 瀬戸内の春』を題材に）

読者の皆様からの投句をお待ちしております。テーマは「祝島」です。応募は、メールまたは郵送にて、応募作品／作品についてのコメント（あれば）／名前（ペンネーム可）を記入して事務局までお送りください。メールのあて先は haiku@iwaishima.jp です。



読書タイム(3) 写真集『私景祝島』

(写真: 山田 イサオ)

祝島ネット21会員の皆さんが出版された本を紹介するコーナー。3回目は、写真家の山田イサオさんが出版された写真集『私景祝島』を紹介していただきます。



『私景祝島』

写真：山田イサオ

出版社：日本カメラ社

発行：2015年9月



山田イサオさん

『私景祝島』（山田イサオ 写真）

この『私景祝島』写真集を出版しようと思ったきっかけは、やっぱりだらだらと撮影していてもダメなので、本を作って祝島島民にプレゼントし、喜んでもらいたいという思いが込み上げてきて、出版する事に決めました。

また、モノクロで撮ろうと思ったきっかけは、やはり路地の色はカラーより白と黒の世界にピタシだったからです。

今の祝島での生活を紹介するシリーズ。第6回目は島の「医療」についてご紹介します。

田舎暮らしをするうえで、心配になるのは医療の問題でしょう。特に、高齢になってくると切実な問題になってきますね。祝島では以前、人口の多い頃は開業医が常駐していました。私が島に生まれた昭和30年代後半には、岡本医院の岡本先生が島に常駐されており、何かあった時にはすぐに岡本医院に行って診察をしてもらっていました。その後も、昭和の終わり頃まで数十年間に渡って岡本先生が島の皆さんの診察をされていたようです。

◎祝島診療所

現在は町営の診療所に、週2回（水・土曜日の午後13:40～16:40）、本土からお医者さんが診察にいられています。ただし、荒天のときは診療が中止になる場合もあります。



祝島診療所

島には高齢者が多く、持病を抱えている人も多いため、本土の病院に通っている人もいます。柳井市周辺の病院に通う人が多いですが、病気によっては周南市や岩国市の病院に通う人もいます。本土の病院に行く場合は、早朝の定期船で島を出て、夕方の定期船で島に帰ることになりますので、一日仕事になってしまいます。交通費だけでもかなりの出費です。

また、急病や重病の場合は、クリニック船で本土（多くの場合は室津）まで搬送し、救急車で柳井市の周東病院に運ばれることになります。自宅から港まで



クリニック船

の搬送が必要な場合は、消防団が対応することになっています。

荒天でクリニック船が出せない場合や、病気によっては、ドクターヘリで徳山中央病院などへ搬送されます。ヘリコプターの離着陸には学校の運動場を使用します。

◎祝島歯科診療所

歯医者さんは、町営の祝島歯科診療所に、週に1回（火曜日の10:50～12:10）、上関にある上関町歯科診療所から先生が来られます。手早く治療していただけますが、診察時間がとても限られていますので、受診する人数が多いと時間的に厳しいことや、荒天の場合には休診する場合があります。

柳井市内の歯医者さんや、上関の歯科診療所に通う人も多いです。



祝島歯科診療所

※この記事の情報は2023年5月現在のものです。

2023年も、そろそろ半ば。新型コロナウイルス感染症は終息したわけではありませんが、5類に移行と決まり、感染対策なども個人の判断に任されるようになりました。島の中でもマスクを外されている人を見かけるようになりましたが、島外の方たちをお客さまとしている民宿を営業しているわたしたちは、マメにマスクを着けたり外したりしています。島のおじちゃんおばちゃんたちは、すでに6回目のワクチン接種を終えた人も多く、気持ち安心されてきたようですが、くにひろストアに来店されるお客さんの大半はまだマスクを着けたまま。まだまだ不安があるのか、いきなり外す、とはいかないようです。

他所から観光に来られたお客さまが、くにひろストアをのぞかれる場合も、ままあります。すぐに渡せるように祝島ガイドマップも店頭で備え付けてはありますが、店内では手狭なので、井戸端もしくは民宿の玄関先にある観光案内所に回っていただくことが多いです。全国津々浦々・・・そして海外からもやって来られるようになって、今年の夏はもっと賑わう予感がします。

数か月ごとに、在庫整理をするついでに、店内の様態替えをするのですが、めっきり売れなくなったものを下げて、売れ筋の商品を見やすい場所に置くという感じ。今回はゴールデンウィーク明けに、その作業をしましたが、とにかく料理をするおばちゃんが減ったという事実には驚きます。材料や調味料が売れなくなって、レンチン商品やお湯を入れるだけのカップ麺や味噌汁、冷蔵庫から出したら食べられるハムやちくわ、



4月前半に店先を華やかに彩った
八重咲チューリップ(アンジェリケ)

てんぷら、そして菓子パンなどが売られています。豆腐でさえ、買う人が少なくなってしまったことに、健康面は大丈夫だろうかと心配になって、アレコレ健康にいい商品や簡単な料理方法を勧めてみたりもするのですが、「一人じゃねえねえ」の一言に、確かに二人そろっている家の方がちゃんと料理しているなあと・・・長生きの秘訣は「夫婦二人」っていうのもあるんだなあと、納得！

さて、梅雨入りした昨今、困っているであろうと思われるのは、足が悪くて、杖を突いたり、押し車を押しているおじちゃんやおばちゃん。傘を差そうとすると、足元が覚束なくて転びそうになるので、雨の日は出かけるのを億劫がるのです。日頃から、おかすの配達を頼まれている家には、10時半から11時くらいの間に店主が配達して回っているのですが、常連さんの顔がお店に見えないと気にかかるので、ついでに「おかすを持ってきたけど、いるかねえ？」と訪ねてもらっています。大抵、「おかすかね、いるいる!」「やれ嬉し、雨じゃねえ行かれんじゃったんよ」と買ってくださいさそうです。押し売りにならぬようにと思いつつも、こう毎日雨続きだと辛気なので、声を掛けるだけでもいいかなあと、お節介かと思いつつも気にかけていることです。

くにひろストア惣菜部は、今現在、金・土・日の週3日間ではありますが、予約のお客さんが日に日に増えてきています。店主共々、歳を重ねるごとに仕事が増えているような気がして、繁盛するのが良いような、悪いような・・・。いくつまで働けるかねえ？みたいな会話が増えている今日この頃です。

「なんか、すぐ食べられるもんはないかねえ」そう言いながらお店の戸を開けたのは、漁師さんの奥さん。沖から帰って来た旦那さんに食べさせるものを買いに来られたらしく、冷蔵庫を開けて「焼き豚」を取り出しました。「最近は何釣れよ?」「えったあ釣れんかねえ」「民宿が再開したけえ、また魚がおるときは頼みたいんよ。おじちゃんによろしゅう言うといてね」「へえへえ、釣れたらねえ」なんてあれこれ話が弾みます。椅子に座って、焼き豚を売場に一旦置いて、財布を取り出しながら、ひとしきり世間話に花が

咲いて、「さあ、帰らんじゃあ、待っちょろけえ」と立ち上がり際に、焼き豚を持ったはずが・・・なぜか手にしているのは「マフィン」。「おばちゃん、焼き豚は?」「うらうら、わしは何を持っちょるんじやろうか、あはは。おなし(同じ)ようにシャカシャカするけえ、持ったんじやが、こりゃあパンかね? 焼き豚か思うて間違えたわあ。やれ、とうじん(バカ)や」と。わたしも無性に可笑しくて可笑しくて、「はあ、いぬる(帰る)」と、笑いながら帰るおばちゃんが戸を閉めても、しばらく笑いが止まりませんでした。「箸が転んでも笑う」というのは、二十歳前の女の子たちの特権というわけでもなさそうで、三度目の成人式も過ぎたのに、いまだにちょっとしたことで笑えるわたし。そしてまた、「男は三年片頬」なんてどこ吹く風・・・店主もまた、いつもニコニコしていて、笑顔を絶やさない優しい店主であります。

(「男は三年片頬」：威厳を保つために、男たるものはむやみやたらに笑わず、三年に一度だけ片方の頬に笑みを浮かべる程度に留めよということ)

くにひろストアの玄関先には、たいてい、何かしらの花が咲くように店主が工夫しています。チューリップやパンジーは姿を消して、今は、ロベリアの青、ベコニアの赤、ヘメロカリスの黄と、なかなか賑やかで、お客さんたちの目だけでなく、心もほんわかとさせてくれています。ぐずぐずした梅雨が明けたら、夏本番・・・いよいよアイスクリームで賑わう季節がやってきます。



5月から6月にかけて店先を飾るのは、左からヘメロカリス、ベコニア、ロベリア

山田イサオ写真館(22) 『壁』

山田 イサオ

このコーナーでは、写真家で祝島ネット21会員の山田イサオさんの写真を毎回1枚紹介しています。山田イサオさんはモノクロ写真にこだわり、祝島では人物を中心に撮影をされています。

『壁』

この小さな自動販売機。
たしか「えびす商店」の壁に埋め込まれていて、自動販売機が飲み物を買って〜と訴えているように見えたので、1本買っちゃいました(笑)。
今も設置されているのかな?

撮影：2001年10月

※この自動販売機、残念ながら、今はありません。



5月9日にNHK-BSプレミアムで放送された『新日本風土記 ～瀬戸内の春～』に、祝島が登場しました。ここでは、番組撮影時の様子などをご紹介します。(番組の再放送は5月14日と19日、いずれもBSプレミアムで放送されました。)

今年初め、瀬戸内海のあちらこちらの「石」に纏(まつ)わる話を繋げて、「瀬戸内と石(仮題)」という1つの番組に仕上げたい、という意向の電話を東京の制作会社からいただきました。まずは2月に下見に来られ、その後3月に半月ほどかけて瀬戸内の各地を撮影されるという日程でした。

◎2023年2月12日 下見

お二人のディレクターさんが昼便で来られて、まずは棚田に居る平さんを訪ねられました。くにひろストア閉店後、久しぶりにわたしたちも棚田を訪ねたのですが、真っ青な空が広がって、とても気持ちの良い一日。下見とは言われながらも、せっかくだからと棚田での平さんのインタビューや平さんの運転するテラーなどを撮影され、次の現場は周防大島だと、慌ただしく晩便で帰って行かれました。

◎2023年3月9日～10日 撮影

9日の晩便で、前回のお二人に加えて、カメラマンさんも来られ、民宿くにひろに一泊されました。

練塀の説明役は、秀人さん。見栄えのする練塀の前で、いつも通り説明していたかと思いきや、ちょっと緊張気味の様子でした。くにひろストアの店主としても、民宿の主人としても撮影されていたので、どの顔が放送されるのか楽しみでした。

棚田の話は、もちろん平さん。棚田だけでなく、自宅での食事の様子や、テラーを運転されているところも撮影されていました。

「石」繋がりということで、なぜか石豆腐の説明はわたしがすることに・・・石豆腐の料理場面やらなんやらを急遽撮影されたので、皆さんの晩ごはんは、午後8時をとおに過ぎていました。幸い、石豆腐は2丁頼んでいたのが、撮影用と料理用とがあって良かったです。

練塀の撮影中、運よく民ちゃんに会ったおかげ



ドローンで撮影された平さんの棚田(番組画面より)

で、ひじきを炊いたり干したりしている場面も撮影できたようで、祝島の春の風物詩としていい場面が撮れてタイミングよかったですと思いました。

2週間、帰京しないまま、瀬戸内地域を撮影し、持ち帰られた多くの映像の編集作業中も、いろいろ確認の問い合わせをいただき、その度、平さんに確認に行ったりもして、進捗状況を知らせていただきましたが、1ヶ月以上かけて1時間の番組を制作されたようでした。試写(NHKの偉い方のチェックのこと)では、祝島パートが大好評だったとお話もあとでお聞きし、嬉しかったです。

下準備、撮影、編集など、時間を掛けられての番組制作、裏方を見ていたからこそ、そのご苦労も思い返されました。

◎2023年5月9日 放送

島内では、いろんな場所、行き会う島の人達、なども撮影されていたので、楽しみ半分、心配半分のドキドキな気分です。テレビの前で放送開始を待ちました。番組冒頭10分ほど、他の地域のどこより長かった祝島の場面。緊張して見つつ、見終わってやっと、ほ～っと肩の力が抜けました。

棚田の全景のドローン撮影は素敵でした。トコトコ歩く平さんも可愛くて。わたしたちがよく聞いた「亀次郎おじいさんの『信念』の言葉」がなかったのは残念でしたが、考えてみれば、平萬次さん自身がもう90歳。『家族三代で築いた』という話に重きを置かれた感じで、「もうテレビは、これで最後

じゃ。NHKさんだから最後のご奉公じゃあ」と、笑いながら言うておられた平さんが、初めて「主役」に見えました。棚田が形を成している間に、撮影いただき、いい記念になったと思います。

秀人さんとわたしの出演場面では、普段通りすぎて物足りなかったのではないかとも思いましたが、「いつも通りで大丈夫です」と言われながらの撮影だったのを思い出しました。そういえば他の地域でも、日々の生活がそのまま映っていて、十分楽しめたので、まあ良かったことに・・・何はさておき、台所のごちゃごちゃ、お店のごちゃごちゃ、あんまり片付いてないところが映ってなくてホッとしたのが正直なところでした。

本当に素晴らしい瀬戸内の「石」の歴史の数々・・・詳しく知らなかったことや、初めて見知ったことなど、どれもとても興味深く拝見しましたが、平さんの棚田も含めて、1つ1つの物語を、もっと詳しく見たかったと思いました。番組の意向や時間の壁・・・きっと秒単位での編集作業だったこともうかがえました。あと、「春」という言葉に、たいいていの方は、暖かさや華やかさを期待してしまう気がします。放送時期が、桜も終わって新緑の季節に入ってしまったことで、季節感にちょっとずれを感じたことと、それぞれの地域の素晴らしい「石物語」がテーマだったので、やはり、仮題にあったようにタイトルには「石」を入れたままの方が良かったかも、と思いました。

BS放送を見られなかった方も多かったかもしれませんが、NHK総合での放送が決まった折には、より多くの方に見ていただけることでしょう。どうぞお楽しみに！

◎余談

放送が終わると、本当にたくさんの友人、知人、祝島関係の人たちから多くの連絡をいただきました。一番多かった感想は、平さんにせよ、民ちゃんにせよ、わたしたちにせよ、「元気そうで何より」と、ご心配頂いたことです。それから、祝島の練堀の風景が見れて嬉しかった、懐かしかった、と。

つい先日、20年ぶりに祝島へ帰って来られた民宿のお客さまの開口一番。「BSプレミアム、3回とも観

ましたよ！」と。「二人のブログも楽しみにして毎回見てるから、初めてじゃないようだけど、はじめまして」とも。タイミングよく、石豆腐も料理にお出してきたので、大変喜ばれました。



← なんといっても主役は平さん



いつも賑やかな → 民ちゃん



← くにひろストアの店主・秀人さん



石豆腐の料理を → 作っている優子さん



← 後ろ姿で登場した石山郁恵さん

主な登場人物（すべて番組画面より切り抜き）

お知らせ & 募集

■2023年度の役員が決まりました

先日実施した会員投票により、2023年度の役員が以下のように決定いたしました。1年間、どうぞよろしくお願い致します。

- ◎会長：黒磯達則（継続） ◎副会長：吉原信一郎（継続）
- ◎事務局長：國弘秀人（継続） ◎会計：國弘優子（継続）
- ◎監査：坂本正幸（継続）、石山泰人（継続）

■「アイランダー2023」開催のお知らせ

国土交通省と日本離島センターが主催する「アイランダー2023」が、下記の日程で開催されることが決まりました。

今年は、東京・池袋の会場でのリアルイベントと、公式HP上でのオンラインイベントが同時開催になります。

- ◎開催日時：令和5年11月18日（土）、19日（日）
- ◎リアルイベント会場：池袋サンシャインシティ・
文化会館ビル2F 展示ホールD
- ◎オンラインイベント：アイランダー2023公式HP
<https://www.i-lander.com/>

尚、祝島ネット21では、今年は公式HPのみの参加にさせていただきますことにしました。



過去のアイランダー出展の様子

編集後記

コロナによる入島規制が無くなり、帰省される出身者の方、待ちかねた釣り客、そして観光で来られるお客さんも増えてきて、だいぶ島が賑やかになってきました。おかげさまで民宿の方も、ずいぶん忙しくなってきました。でも、コロナ禍での3年間で、体が鈍ったうえに還暦を迎え、もう以前のようなペースで仕事するのは無理！と、少しペースを落として仕事をしている今日この頃です。会報の編集作業もペースダウンして、予定より半月遅れでの発行となりましたが、ようやく出来上がって、ホッとしています。

今回、会員リレーコラムを書いていた森光先生が祝島の学校にいられていたのは、もう20年以上も前なんですね。まだ10年くらい前のような気がするのですが、時の経つのが本当に早く感じます。あの頃は、子どもが少人数ながらも、まだ島の小中学校で運動会をやっていて、島民の皆さんが運動場に集まって賑やかでしたね。当時の写真を探していると、懐かしい顔がたくさん写っていて、写真を選ぶ作業がとても楽しかったです。

さて、次号の発行は秋になります。どうぞお楽しみに！

（編集長：國弘秀人）

※事務局では会員の皆さんからの投稿をお待ちしております。投稿はホームページからも

可能になっておりますので、ご意見・ご感想など、お気軽に投稿してください。

※祝島ネット21では随時会員を募集しています。会費は1年間6000円です。

入会ご希望の方は事務局までご連絡ください。



初夏の棚田

祝島ネット21会報「いわいしま通信」第70号

発行日：2023年6月8日 （頒価400円）

発行者：祝島ネット21事務局

〒742-1401 山口県熊毛郡上関町祝島

ホームページ <http://www.iwaishima.jp/inet21/>